

## 下水汚泥乾燥施設の運転期間の見直しについて

### (1) 当初計画

- 平成 25 年度末までに、保管汚泥(平成 23~24 年度保管)を全て乾燥処理する。
- 乾燥汚泥は、国が責任を持ち、可能となり次第場外へ搬出する。

### (2) 計画の見直し

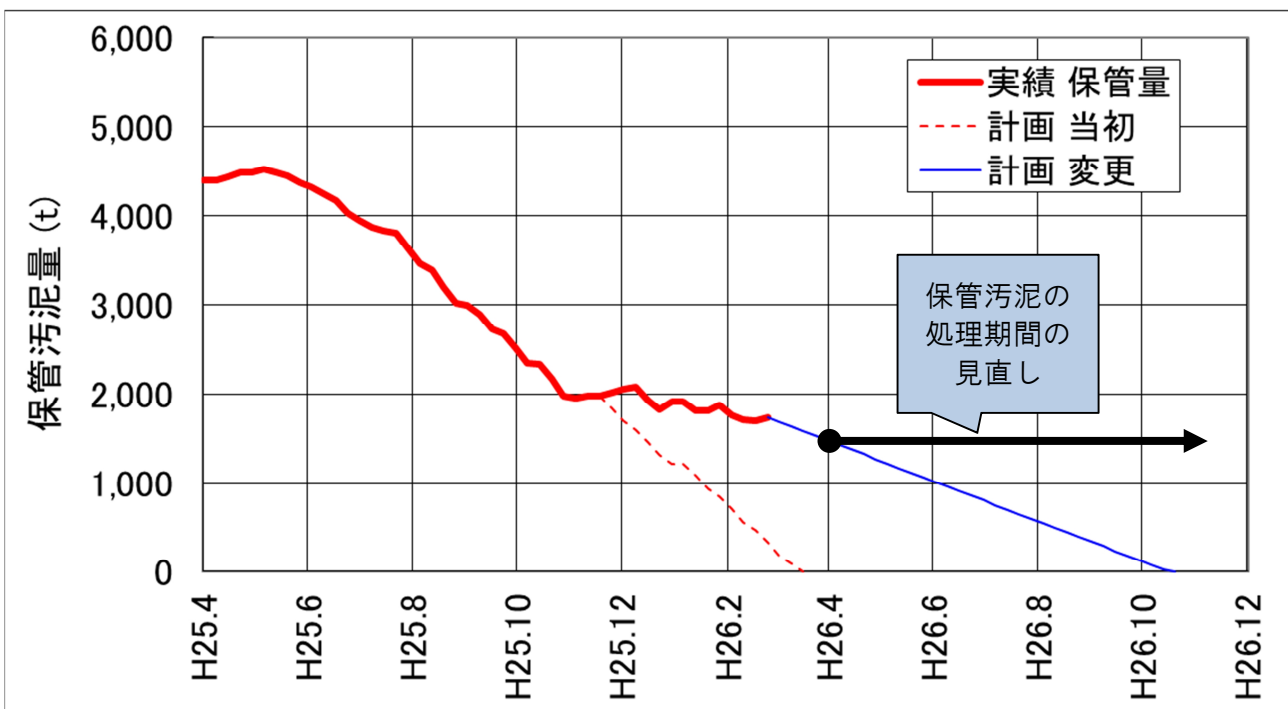
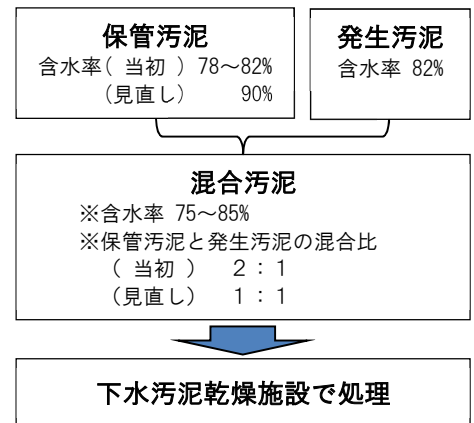
- 平成 26 年 10 月末頃までに、保管汚泥(平成 23~24 年度保管)を全て乾燥処理する。
- 乾燥汚泥は、国が責任を持ち、可能となり次第場外へ搬出する。

### (3) 計画を見直す理由

保管汚泥の含水率(水分の割合)が想定よりも高いものがあるため(約 90%)、乾燥処理に時間を要することが明らかとなりました。

適正な処理を行うためには、日々発生する含水率が低い汚泥(約 82%)を混合して、混合汚泥の含水率を下水汚泥乾燥施設の対応範囲(約 75~85%)に調整しながら乾燥処理する必要が生じました。

このため、運転期間の延長が必要となり、保管汚泥の処理期間は平成 26 年 10 月末頃まで掛かると見込んでおります。



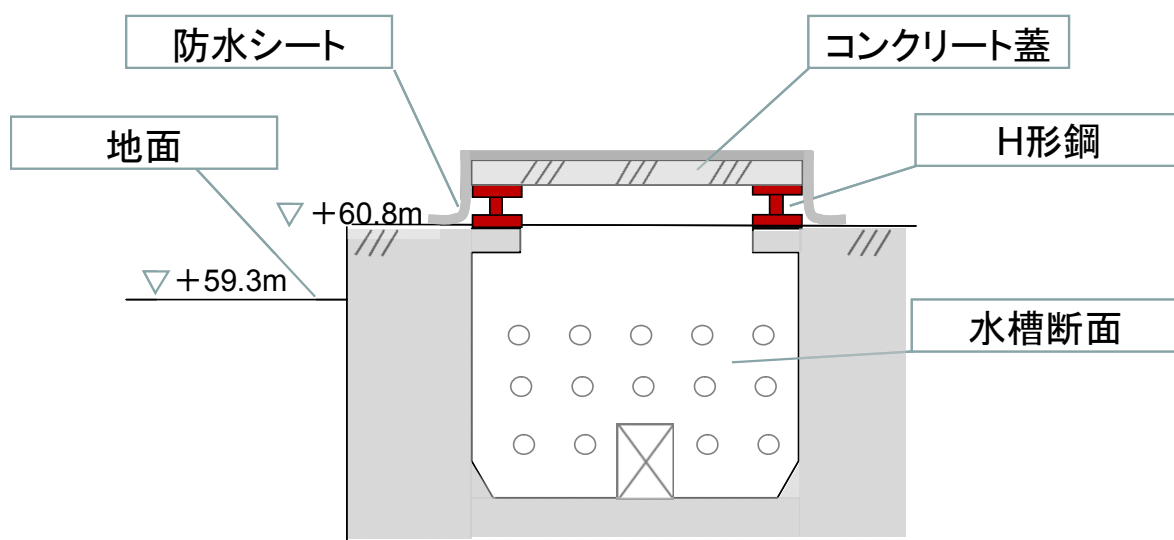
# 水分量の多い汚泥の乾燥処理について

## 保管汚泥の状況

- ◇ 河川側の保管汚泥の水分量が道路側と比較して多くなっています。
  - 道路側 含水率（水分の割合）78～82%（おから状：一般的な汚泥の性状）
  - 河川側 含水率（水分の割合）最大90%（ソフトクリーム状）

## 水分量が多い原因

- ◇ 調査の結果、河川側の水槽上部（歩行面）が、くぼ地になっている事がわかりました。
- ◇ 大雨時に雨水が河川側水槽上部に滞留し、シートの間隙から侵入したものと考えられます。



## 水分量が多いことによる影響

### ◇ 放射能の影響

- 水分は放射線の遮へい効果があります。水分量が多くなることで放射線の外部への影響は増えません。
- 汚泥はフレキシブルコンテナバックに入れられ、処理場の水槽に保管されているため、水槽外に漏れることはありません。



### ◇ 汚泥輸送設備への影響

- ポンプ、コンベヤ、乾燥機内部の汚泥輸送が不安定になります。

### ◇ 乾燥施設への影響

- 水分が多いため、水分蒸発に必要なエネルギーが増加し、結果として処理能力が低下します。
- 乾燥施設は含水率約80%の汚泥を1日に30トン処理できる仕様です。含水率80%を超える汚泥では処理能力が低下し、85%を超える汚泥では処理が不安定になります。

## 対策

### ◇ これまでに行った対策

- 水分の影響で施設の安定運転が難しい状況が確認された場合、施設を一旦停止し、状況を確認しながら運転しました。結果として処理する汚泥量が減少しました。

### ◇ 今後の対策

- 施設が安定運転できるように日々発生する含水率の低い汚泥との混合割合を増やし、運転します。(目標含水率85%以下)
- 混合割合を増やした結果として、処理汚泥量が増加するため、運転期間の延長が必要となります。
- 降水量が多い場合でも水槽内に雨水が侵入しないよう、隙間の目地埋めを行います。

今後も、施設の安全運転、地域環境の保全、早期の処理完了に向け、全力で努力いたします。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

平成26年3月

環境省

日本下水道事業団・新日鉄住金エンジニアリング・三菱総合研究所